

高原操

師匠と前座

師匠と前座
（談）

私は熊本五高の出身で、明治三十一年七月の卒業です。先生が熊本へ来られたのは何年でしたかね。明治二十九年ならば、私は二年教わったわけです。その後先生が朝日新聞に入社されてからは、又一つ釜の飯を喰うようになったもので、比較的縁故の深い方です。今大審院長をされている池田寅次郎君などは、私より一年後で、私は文科で向うは法科でしたが、よく出来て先生に可愛がられたものですよ。あの男の話も聞いて御覧になるがいいで

しよう。

奥さんが熊本へ来られたのは何年でしたかね。ええ、先生が春来られて、その年の夏でしたって？　そうでしたかね、奥さんの来られない前から土屋忠治と俣野義郎の二人が先生の宅に置いて貰っていましたよ。俣野——例の多々羅三平が生きてると、いろいろ面白い話があるでしょうが、去年死にましたね。私なぞと違って、池田はよく下読みをして来るから可愛がられていました。その時分の高等学校は生徒の数も少なく、文科と云いまして一級三十人足らずでしたが、先生はよく人の名を覚

えていられ、下読みをしないで出ると、わざと当てられるのには衆皆弱みんなつたものです。注意深い、厳格な先生で、文士としての先生と教師としての先生とは、全く別人の観がありましたね。私なぞも下読みをしないで出て、当てられると困るので、本の蔭に隠れて、こっそり字引でも引いていようものなら、直ぐそれを目附けて、「高原さん、どっちの頁を見えています？　今そんな所を教えてくださいませんか。下読みをして来なけりや、教場へ出て来るな」と、頭から遣られて閉口しましたよ。なに、これは私一人に限ったことじゃない、誰も遣られるのですが、

私もそう云われたことがあるから記憶おぼえているのです。

教科書は「Opium Eater」や「Attic Philosopher」でしたかね。何でも易しいものを沢山読んだ方がいいと云う主旨のようでした。その外課外講義に「Othello」を教わりました。朝早くから遣わりかたつて来て、時間外に教えて頂いたのですよ。それから割方露骨わりかたなことを云う人でしたね。「Opium」の中に妙な文句があつた。「誰どさんは何う思うか」、「彼よさんは何う考えるか」と、一人一人訊かれたが、自分でも能く分らないらしい。そうも取れるが、こゝも取られるというような塩梅でね。で、一々他人ひとに訊

いて置いて、最後に「俺にも能く分らぬ」と云われるのですよ。その後の言草がこうなんです。「日本の新聞を読んでも、全部隅から隅まで分るものじゃない。況ましてや外国人の書いたものだから、分らぬのが当り前だ。僕もこの学校にあるだけの字引はシムル悉く調べてみたが。どうもはつきり分らない。高等学校の教師としては、これだけ調べれば沢山だ。これ以上調べる義務はない。それ程の月給は貰って居らぬ」と。こんな皮肉なことを云われるのですよ。で、そんな事を云われても、学生は皆心服していました。一体、英語の文典位くらゐ不正確な、紛ら

わしいものはないと、よく云っていられました。力がなくて胡魔化すのでない。力があってそう云われるんだから、学生も心服していたのですよ。その時分の学生は、出来ぬ先生と見ると、随分いじめたものですが、先生には却て生徒の方がいじめられたものです。

明治三十年に初めて五高に短艇部ボートが出来た。あなたも今度入いらしたでしょうが、あの画え図ず湖に艇庫を拵えて、あそこで遣ったものです。その時の寄附金勧誘状を先生に頼んで書いて貰ったことを憶えています。先生が部長であったか何うかは、つい忘れましたがね。私なぞは、

そう云う手紙の署名人は、総務誰某、部長誰某、委員誰某というように、先ず偉い人から始めて、だんだん左に並べて書いて行くものだと思っていきましたが、先生の云われるには、「そうじゃない。逆に一番下の者から始めて、宛名に接近した所に偉い人の名前を書くのが本式だ」ということを、初めて先生から教わりました。よく知らんが、本当にそういうものですかね。兎に角先生には、そう云った細心な所がありましたよ。で、私どもは遽あわて活版屋を後から招よんで、その通りに直させたことがあります。

漢文の書物をよく熊本市内の古本屋にあさっていられたことは、誰も知っていることです。思うに、あの頃の人には、日本文学というものを、在来の国文漢学から離れて、世界的の目からそれを研究し直すために、英文学を研究したんじゃないでしょうか。そうだとすれば、先生もその一人であつたと云われましょう。英語研究のために、文部省から外国留学を命ぜられたことは、大分不服であつたらしい。私はその当時別段そんな話を聞いたわけではないが、後から思い合せると、どうもそう考えられる。

先生から頂いて、私の持っている手紙の中に、『坊つちやん』や『虞美人草』を外国語に翻訳されることは困る、実は絶版にしたい位に思っているが、時々検印を取りに来て、幾分か金が入るのと、又どうせ一度さらした恥を今更引込めても仕方がないから、あの儘にしているんだと云ったような皮肉なことを云っていられる。(編者いわく、『坊つちやん』の方は翻訳されてもいいが、条件つきでなくちや厭だと云ってられるのだ。) 強いて独訳したい御希望ならば、『門』とか『彼岸過迄』とか『行人』とかなら御相談してもいいと云うような意味のことも述

べていられる。思うに、『門』『彼岸過迄』や『行人』
を書かれる頃から、『虞美人草』に見るような、漢文脈
を模倣した日本文が厭になつたんじゃないでしょうか
ね。例えば「秋風颯々しゅうふうさつさつ」と書いた所を、「秋の風がさ
らさらと鳴る」と云つたように、自然になつて来た。つ
まり「颯々」が「さらさら」と変化したように、私には
思われるのですよ。

ええ、和歌の浦には、先生と後醍院ごたいいんと私の三人で行き
ました。私は樺太から帰つて直ぐに、あちらの講演会へ
遣られたものです。その時先生が、「只今前座を勤めた

高原は、実は私のお弟子だが、お弟子でもあの位巧いのですから、お師匠さんはさぞ巧かろう云々」と云われたのを記憶しています。そんな所が大いに受けたものです。ね。あの時箕面みのおへもお供したが、彼処あそこへは私一人で連れて参りました。箕面には朝日新聞の倶楽部で、朝日閣とというのがあって、そこへ行ったものです。近所に秋琴楼というお料理屋ちややがあって、その秋琴楼に又お婆さんがあった。そのお婆さんが遣って来て、倶楽部のお婆さんの頭を剃ってやる。処が、その婆さんが二人とも聾なのです。聾と聾の話しを先生は頻しきりに筆記していられる。成

程、こういう所の観察から、先生はそれを材料にされるんだなと思つて見ていましたが、果してそれが何かの中に出ていきますね。『行人』でしたか、『彼岸過迄』でしたか、それとも随筆の中でしたかね。

そう云う細かい観察もそうじゃが、『坑夫』の間接経験の描写には一層驚きましたよ。あれは全然他人から聞いた話でしょう。先生は鉾山の豎坑たてあなの中へ這入ったこともなければ、又あんな坑夫のお葬礼なぞ見たこともない筈だ。それがあれ程詳細に、実際見て来たように描写してあるんだからね。

話は変わるが、奥さんは厳かった。先生が大阪で病気に
なられて、湯川病院に入院された時、社では驚いて電報
で奥さんを招び寄せた。その時ステーション停車場へ迎えに行つたの
は私ですがね、病院へ連れて来ると、病室へ這入るなり、
「大阪ではお菓子なぞ病室へ入れることを許すのか」と、
いきなりこうなんだからね。それには参りましたよ。え
え、お見舞いの菓子箱がそこに積んであつたのです。す
ると、先生はにやにや苦笑しながら、「まあ、そう云わ
んでも好かる。自宅を出る時、お前はお守札なぞ衣かくし囊へ
入れてくれたが、それでもこうして病氣になつたからな」

と云っていられた。実際先生は始終洋袴ズボンの衣囊にお守札を持っていられたよ。

何どう云うものか、先生には一番親しいものが一番先に遠ざけられる。俣野義郎、土屋忠治などがそれですよ。彼奴等あいつらは先生の宅に置いて貰あっていたから、一番欠点も目に着くわけですかね。私などは学校時代からそう親しくもしていないから、まあ、そんな目にも遭わなかったのですがね。処で、世の中に親しいものの随一は、他ならぬ奥さんだ。だから、何遍も「出て行け！」と云われる。それが少し経つと、又何でもなくなると云うわ

けですかね。あそこいらは、一つは病気の加減でもあったのでしょね？ 私の話はまあこれ位なものです。

（『漱石全集』（昭和十年版）月報第十四号
（昭和十一年十二月））

日本文学電子図書館

師匠と前座

著 者：高原 操

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館